ディキンソンとヒギンソン

樋　口　日　出　雄

今日，エミリイ・ディキンソンの詩名は高いが，彼女が在命中の19世紀後半には，その独自の詩風を知る人は少なかった。エミリイが生きた時代を多少なりとも自然科学的に律していこうとするならば，エマソンを中心とする超絶主義の時代色がまず浮かび，さらに南北戦争以後の自然主義的リアリズムなどに触れる必要があるが，エミリイの独自の詩風とは，これらの時代色，時代相によって都合良く色分けできるというものではない。孤立して詩作した彼女には，文学的サロンめいた詩人仲間の集会の場は望むべくもなかった。ただ詩作中心の半生において，1人の評家，ヒギンソンを頼るべき文学的支柱としてみずから，師弟の交わりを乞う筆を取ったことは，詩的経歴も有するヒギンソンという人物が相手だけに，充分考察に値する。では，一体ヒギンソンとは何者か。

> Higginson — (1823〜1911), U. S. reformer, soldier and author, active in the cause of abolition, was born at Cambridge, Mass., on Dec. 22, 1823.

これは「ブリタニカ辞典」(1964年版) によるヒギンソンの紹介であるが，この辞典が書き落した点に，当面の視点を据えて，今度は，この辞典の <Dickinson, Emily Elizabeth> の個所に目を転じるならば，この詩人の権威ある研究者 Thomas H. Johnson の記事により，ヒギンソンとエミリイ・ディキンソンとの書簡を中心とする交友関係がうかがえる。

ヒギンソンとエミリイとの交友関係において，そのハイライトをなすのは，1870年の夏，アマーストのディキンソン邸において両者が互いに初対面をした時であるが，幸いなことに，ヒギンソンは妻に手紙を送ってこの場面の様子を伝え残してくれている。エミリイの死後，ヒギンソンは，この時の手紙や数多くのエミリイの書簡をもとに『エミリイ・ディキンソンの書簡』という記事を，当時の一流誌「アトランチック

・マンスリー」に発表したのである。現在では，このヒギンソンの回想記事は，一部の資料集に再録されているので（多少，省略された所がある），ディキンソン研究者はこれらの書物につけばよいのである。今回，当時の「アトランチック」を実見に及んだ限りでは，この雑誌のバックナンバーを通読するだけでも，ヒギンソンとエミリイ・ディキンソンの周辺の文学的風土を学ぶに充分な題材があるようである。

これらの資料を以下に列記してみると，次の如くである——

① April, 1862 : Higginson's
"Letters to a Young Contributor"

② October, 1891 : Higginson's
"Emily Dickinson's Letters"

③ January, 1892 : T.B. Aldrich's
"*In Re* Emily Dickinson"

本論では，この実見できるアトランチック誌のバックナンバー中，ヒギンソンの『エミリイ・ディキンソンの書簡』を第1次資料とし，ハーヴァード大学出版のジョンソン版全集その他を準資料として採用した。

I

いまかりにエミリイ・ディキンソンの詩篇を時代区分して，統計的に，すなわち数量比較をもって詩人のデーモンの存続状態を問うならば，次表の如き動向があることが判明する。

1858	—	51	1862	—	366
1859	—	93	1863	—	140
1860	—	63	1864	—	172
1861	—	85	1865	—	84

奇しくも，南北戦争の推移に歩を合わせて，戦乱以後彼女のミューズも衰えたかに見える。だが，最初に断ったように，これはあくまで統計的に数量比較を行った結果であって，この結果をもって彼女の詩作が次第に衰運に向ったと判定することはできない。1862年，エミリイがヒギンソンを相手に自作の詩稿の講評を求めて，書簡によ

る直談判を試みて以来，1870年，互に，初の面識をもち，1886年，この生涯未婚の詩人の命が絶たれるに至るまで，四半世紀におよぶ絶えざる書簡による交渉は，彼女の詩作が，よってたつところの心理構造を究明するにつけても，軽視できないテーマである。

「ブリタニカ辞典」でも実見できるように，ヒギンソンには身分として，「文筆家」という一名が与えられるが，南北戦争を境として，その前後を比較してみると，戦前においては，彼は「文筆家」というよりはむしろ，婦人問題，奴隷問題などの社会改革に寄与する有力運動家といったほうが当を得ており，戦争に参加してこれらの運動が中断されてから以後は，文芸運動に対するジャーナリストの側に立つ評論家として活動したが，その思想に格別の深遠性を認めることはできない。彼としては，戦時中の軍務にあって公的生活を送った当時の呼び名，「ヒギンソン大佐」(Colonel Higginson) という名で衆に親しまれるのを，あるいは歓迎していたのかもしれない。初め神学を学び，若くして詩人として立ちながら，動乱のアメリカ思想界に出て社会的立場から世論の修正のため，みずからの生涯を賭けるというためしは，当時のアメリカ北部地方の青年に珍らしくはなかったであろうと思われる。

1862年，アトランチック誌に掲げた，ヒギンソンの「若き文学者への手紙」という青年文学者へ文壇登場を勧めた論説も，いうなれば，ヒギンソンの社会的良心の発露であって，身寄りのない子供に施設が開かれていることを説く社会保証の観点と，さほどの径庭があるわけではない。

ヒギンソンの論説は3，4名の若き投稿家の投稿の意識を呼び覚ました。詩を送ってヒギンソンに専門的鑑定を依頼した人数も，エミリイただ1人ではなかったのである。「あの論説は私の雑誌に今後愚作を送り込む糸口になるだろう」という危険を感じながらも，彼はエミリイの詩稿に目を通すと，直ちに興を覚え，返事の筆をとって，一切の専門的な問題には口を出さず，彼女の年齢，詩人としての経歴，好みの書物などを質問し，あわせて自分としては好ましからざる見本と思っているホイットマンを試みに読むことを勧めているのである。こうして，1862年は偶々エミリイの生涯を通じて，一番多作の年であると同時に，19世紀のアメリカ文学史上の3大事件の年と見做されるまでになった。ジョンソン教授によれば，このエミリイとヒギンソンとの起縁の年と並べられるのは，エマソンのケンブリッジ（ハーヴァード大学の所在

地）での講演（August 21, 1837），いまひとつは，ホイットマンの『草の葉』の初稿の出回った時期（July, 1855）であるという。（註1）

エミリイの風変りな手紙の文面も興味深いが，何といっても彼女の詩に印象を深くされるのは，詩人としての彼女の魅力にひかれる者には当然であろう。彼女が最初の封書の中に同封した数篇中には，彼女の30余年の過ぎ去りし生涯を回想する企てを秘めながら，宝石を平らに仕上げるように念入りに，砂のごとき現実から詩心を培かう有様を唱ったものがある。ヒギンソンの記事のまま引用すると，

I

We play at paste
Till qualified for pearl
Then drop the paste
And deem oneself a fool.

II

The shapes, though, were similar
And our new hands
Learned gem-tactics,
Practicing sands.

（大意）

I	II
真珠と見まがうほど	でも，姿かたちの見分けがつかないので
平凡な石に磨きをかけ	私共の手は，また，
その石を捨てたあとで	宝石採集の策をこらして
私共は自分をあざ笑います	石の塊をいじくるのです。

ヒギンソンは，彼女の詩の悪文法が及ぼす効果を考慮して，原稿から改作したものを観賞用の見本よろしく掲げているが，実作は次の通りであった——

I

We play at Paste ——
Till qualified, for Pearl ——

Then, drop the Paste ——
And deem oneself a fool ——

II

The Shapes —— though —— were similar ——
And our new Hands
Learned *Gem*-Tactics——
Practicing *Sands*.

ヒギンソンは，このような文法上，文体上の破格をもつ詩篇にも詩才を認めたが，彼女の風変りな詩風を推賞はできかねていた。彼自身のことばを借りれば——

> まったく新しい，独創的な詩才だという印象は，これらの4篇の詩を初めて読んだときも，半世紀に及ぶ交わりを経た現在も，はっきりと私の心に残っている。いったいこれほどすばらしく，しかもなお，これほど批評しにくいものに，文学上どのような地位を与えるべきであろうか，という永久に解決できない問題がそれ以来生じてきた。　（*A. M.* p. 445）…（註2）

ヒギンソンにとって，アマーストに住む謎の通信相手の謎は深まるばかりであった。彼はこの相手の韻律について，彼女の犯した文法的破格の効果について，出版の意志ありとすれば，余りに「気まま」（wayward）であると言わざるを得ない弱点があることを説いた。特に，最初の2，3通の書状のやりとりを通して，何とか形を整えるように忠告を重ねるというヒギンソンの善意がありありと見えるが，エミリイは，出版の意志については，確たる決心がないことを述べ，詩形についても，ナイーブな言い抜けをしただけであった。この年の暮，ついに意を決して，北軍の一翼として結成された黒人部隊の指揮官として参加したヒギンソンは，隊列を作っている黒人兵の，数をわきまえぬ見当はずれの長列に，エミリイの詩の自由な韻律を想像したかもしれない。

II

エミリイ・ディキンソンの詩業の文学的価値を目して，ホーソーンとエマソンの中

間に位置付けを行ったのは，今世紀の初頭に啓蒙的な「ディキンソン論」（註3）を著わしたアレン・テイト教授の業績であるが，当時のお上品な文化を代表して，エミリイの詩を検察したヒギンソンにはそんな科白は吐けなかった。エミリイは，ホーソーンを目して，「彼は・・・心を捕え，動転させる・・・」という感想を残しているが，ホーソーンが，当時のピューリタン社会のお上品さに対し，根本からの弾劾をやったとすれば，エミリイもまた，極めて狭い範囲に読者を限っていたにせよ，人々の心胆を寒からしめるホーソーンの同族であることを，ヒギンソンは見抜くことができなかった。エミリイの詩には，ホーソーンほど深刻に構えたゴシックロマンスの背景はないようだが，そのかわりに人びとの虚を衝くウイットやユーモアの天分があった。彼女は当時の，お上品な文化とか伝統とかに対して，深く敬愛すると同時に，すぐふざけにかかる多分にヤンキー的素質を持ち合わせていた。彼女は，ヒギンソンに愛読書として「黙示録」をあげておきながら，よそではこう，うそぶいていた——

「黙示録」の来迎よりも
裸眼の来援を，
Not "Revelation" 't is that waits,
But our unfurnished eyes.
(*A. M.* P. 449)

もちろん，ここには，眼病に悩んだ自分の体験も唱い込まれているのである。しかし，「黙示録」と自分の眼球とのとりあわせは，ウイットに豊んだ思い付き，コンシートであるといってよかろう。

オリジナル・コピーの編集と銘打って出版されたジョンソン版の詩稿が，以前のものと比較された研究は，今日では珍らしくなくなったが， Oscar Williams 編のアンソロジーとジョンソン編の全集とを比較したブラックマー教授は，次の如き驚くべき実例を発見した。まずはじめにアンソロジーの詩稿，次にジョンソンのオリジナルを掲げる。（註4）

I

Much madness is divinest sense
Much sense the starkest madness

In this, as all, prevails.
Demur, yor're straightway dangerous.

II

To a discerning eye
'Tis the majority
Assent, and you are sane;
And handled with a chain.

〔オリジナル〕

Much Madness is divinest Sense ——
To a discerning Eye ——
Much Sense —— the starkest Madness ——
'Tis the Majority
In this, as All, prevail ——
Assent —— and you are sane ——
Demur —— you're straightway dangerous ——
And handled with a Chain ——　　(註5)

こうした原子物理的詩法は注目すべきであろうと思われる。これ以上分割不能と思われた中間子にも，2種類にさらに分類できる小物体が含まれるという今日の物理学の理論よろしく，2派に寸断できる詩というものは，このエミリイの作品を珍らしい例外とする外は空前絶後であろう。ブラックマー教授は，こうした詩法によって彼女の心理の裡が覗けるとまでいっている。当時これほどの容赦ない奇作を実験した「驚くべき子」は，さぞかし公式主義的な読者を驚嘆させたことであろう。ウイリアムズの編集ぶりが際立たせてくれたのは，エミリイの詩行の見事な頭韻・尾韻の配置である。そしてウイリアムズの詩稿に見る最終2行の母音Aの頭韻は，その重さからいって，至上，普遍のシンボルとして語りかけられるあのヨハネ黙示録のAと対比されるべきものだろう。

当時の読者は，まずヒギンソン程度には公式主義者であったといわざるを得ないが，エミリイに発表の場を与えようとした良き理解者も，全然無いわけではなかったのである。エミリイの処女作「ヴァレンタイン」の詩を掲載してくれた，隣り町の新

聞「リパブリカン」の編集員のボウルズ (Bowles), それ以前に彼女を詩作に導いてくれたニュートン (Newton) の如き理解者は忘れてはならない存在である。この2人について, エミリイは第2便 (April 26, 1862) で, 密かにヒギンソンに報告している——

> When a little girl, I had a friend who taught me Immortality; but venturing too near, himself, be never returned. Soon after my tutor died, and for several years my lexicon was my only companion. Then I found one more, but he was not contented I be 〔sic〕 his scholar, so he left the land.
>
> (*A. M.* P. 445)

ここで1人が「この地を離れた」 (left the land) といっているのは, 先年 Bowles がヨーロッパ旅行へ立ったことを暗示している。やむなく, エミリイはヒギンソンへ奇妙な筆跡の詩稿を送って, 出版するあてのない詩の修業を続けるのである。

Ⅲ

ヒギンソンとディキンソンの交際は, お互に師弟の義務とか, 約束とかいう固苦しい特殊性を帯びたものではなかった。弟子の側では, アマーストの自家に閑居して, 師がたとえ戦場で負傷しようとも, さほどあわてふためいた素振りを表てに出さなかった。自分の "circumference" の細心な観察者にとどまることが, みずから任じたエミリイの天職であった。年譜によれば, ヒギンソンとエミリイとが第1便をとりかわした1862年頃を頂点として, 以後エミリイは詩作を控えてゆくのであるが, これはエミリイがヒギンソンから出版の約束をとりつけることに成功しなかったためでも, あるいはヒギンソンが時折彼女をはげましたがため, 彼女が思いあがって, 小成に安んじたわけでもないであろう。数の上では少数ながら, 詩人としての能力において, 彼女に明らかな成熟ぶりが備わるのは, これ以後のことである。

エミリイとヒギンソンとの交友は, 2度のスクーリングを含む長期の通信教育にたとえられよう。師が生徒宅に出向いた, 1870年の奇妙なスクーリングにおいては, 生

徒の旧宅にある古風な家具類は別にしても，生徒の語るところも，また古風で警句的であった。それに，生徒の行為にも警句的といえなくもないふしがあった。古風な服装で，儀式的に師に一輪の百合の花を捧げ，"This is my introduction" と告げたのは，あるいは時代離れしたユーモラスな場面ともいえるが，訪問客として人びとを招待することは殆んど皆無といえるほど，厳しい世間との断絶の最中にあって，この歓待はいかにも，いわくありげな行為である。もしディキンソン宅からホテルに帰るヒギンソンの胸に，この百合が埋もれていたとするならば，ホテルで妻にあてて筆をとる彼の傍にこの百合が置かれてあっても不思議はない。はたしてヒギンソンは，この百合のもつ象徴的な意義を計りきれたであろうか。彼女はアマーストの谷あいにある「自家」という学寮の学風あるいは学歴を示すところの，ひとつの警句的証明として，この百合の花をさしだしたにちがいないのである。「あなたの物言いでいえば，私には教育がない」 ("..but in your manner of the phrase had no education") といった彼女の言葉もひとつの例証になる。(*A. M.* P. 445)

2人が対面してから1ケ月余りたった9月26日づけの手紙は，2人の間にある関係の転換があったことを示す重要な資料であり，評家の注目するところであるが，重大なことはこのアトランチック誌上に現われた記事では，2人のあいだの不和を暗示する個所が，ヒギンソンの手により抹消されている点である。たとえば2人の不和を暗示すると見られる次の詩句——

> Trust adjust her "Peradventure" ——
> Phantoms entered "and not you."

これらは，ものの見事に省略されている。ただ別の方面から注目されるのは，

> After you went, I took Macbeth and turned to "Birnam Wood." Came twice "To Dunsinane." I thonght and went about my work . . . (*A. M.* P. 454)

という同じ書簡中の言葉で，この不和状態において，この危機において，シェークスピアが端倪すべからざるモーメントとして意識されているのを知るのである。「シェークスピアとエミリイ・ディキンソン」とは，よくとりざたされるテーマであるが，ここにもそのテーマの重大な一端があるというべきかもしれない。

ともあれ，ヒギンソンとエミリイ・ディキンソンとの四半世紀にわたる交友の合間に，オクターブの高いシェークスピアの文句を散りばめたエミリイの書簡が数多く綴られたことは事実で，これは，あるいはアメリカ文学史上の一事件というだけにとどまらないかもしれない。シェークスピアのアメリカ合衆国への移入という点で，アメリカ文化史上でも注目すべき題材と思われる。

エミリイとシェークスピアとの絆という論点は，ヒギンソンの記事には不足しており，最前の『マクベス』にアリュードした文句と，アマーストでの対面の際に彼女が語ったという，シェークスピアをおいて，"Why is any other book needed?" というシェークスピア賛美の言葉のほかは，詳しい事例に事欠くのである。「シェークスピアとディキンソン」という巨大なテーマの一端に礎石を打つつもりで，ヒギンソンあての書簡に関係のあるシェークスピア的色彩のある文句を，ここで2，3とりあげておこう。

第1の例は，ヒギンソン宛の書簡文中にある次の語句で，1879年に綴られている，

> Dear Friend, —— Brabantio's gift was not more fair than yours, though I trust without his pathetic inscription, "Which but thou hast already, with all my heart, I would keep from thee."

(大意)

> Brabantio が「まだおぬしのものになっていなかったら，文句なしに断ったであろうに」といいそびれたとしても，私は，やはり Brabantio を信じる者ですが，その Brabantio の論をもってしても，あなたの公平な論には適いませんでした。

いうまでもなく『オセロ』に登場するデスデモーナの父親ブラバンショーの科白を借りて，当時のアメリカ作家に遠慮のない筆を振ったヒギンソンの批評に，機知あふれる意見を供えたのである。

いまひとつは，ヒギンソンの記事の終末近くにあるエミリイの詩篇で，父の死去に母の病気が重なって，神経質になっているせいか，いささか手短かに過ぎたりする弊はあるがテーマはシェークスピア風である。

A death-blow is a life-blow to some,
Who, till they died, did not alive become;
Who, had they lived, had died, but when
They died, vitality begun.

刈田元司氏はこの詩篇から『尺には尺を』やさらに，『ジュリアス・シーザー』の次の文句を連想されているが，「死」というテーマに最も多くの思念をめぐらしたこの詩人の言に，シェークスピアの悲劇の影がつきまとうのは当然で，これらも連想の及び易い卑近な例であるといわなければならない。（註6）

Be absolute for death; either death or life／Shall thereby be the sweeter. (*Measure for Measure*)

Cowards die many times before their deaths;／The valiant never taste of death but once. (*Julius Caesar*)

だがヒギンソンがこの詩篇を目して，漠然と「17世紀風」という評言を与えたのも形而上派という一派の詩人を考えてみれば，一理ある論である。形而上詩人のうちでは，彼女は Vanghan を読んでいるので，彼女には形而上派詩人の修辞法の世界は，あながち無縁であったはずはない。だがこのような手短かな断片にも，彼女独特のマナリズムがあることは争えない。逆説的にいえば，彼女が最大限にマナリズムを発揮したとき，彼女の詩風はシェークスピア風にも，17世紀風にもなったといえるかもしれない。

ヒギンソンに『オセロ』の文句を書き送った1年前には，外遊を体験したヒギンソンにシェークスピアの生地を見て，さぞかし心安らかな旅であったろうと，みずからの想いを述べないではおられなかったエミリイであった。ヒギンソンは，記事の最後に，「夏」をテーマとして唱った彼女の詩一篇を引用して，彼女の生涯をなつかしんでいる，

As imperceptibly as grief
The summer lapsed away,
Too imperceptible at last
To feel like perfidy.

A quietness distilled,
As twilight long begun,
Or Nature spending with herself
Sequestered afternoon.

The dusk drew earlier in,
The morning foreign shone,
A courteous yet harrowing grace
As guest that would be gone.

And thus without a wing
Or service of a keel
Our summer made her light escape
Into the Beautiful.

シェークスピアと「夏」のテーマとの結びつきからいえば，すぐに有名な "Shall I compare thee to a Summer's day" (*Sonnets*) などが思い浮かぶが，ここでは，むしろ "The Passionate Pilgrim" にある "summer morn" を青年時代にたとえる詩句も，当然斟酌される必要がある。

Crabbed age and youth cannot live together:
Youth is full of pleasance, age is full of care;
Youth like summer morn, age like winter weather;
... ...

ここでシェークスピアは，題名どおりいささか passionate な青春礼賛をするわけだが，これとくらべると，エミリイ・ディキンソンの詩に見受ける，「黄昏の如く」「来客の如く」などの詩句には，あるいは「光学的集中」(distill) を見せながら，あるいは「心に痛いほど」(harrowing) 愛想よく見せながら，移ろいゆく，より繊細な「夏」が表現されているというべきかもしれない。

エミリイの「夏」とは，シェークスピアの作品を心安らかな詩的オアシスとして，このオアシスを求める，このうえなく心痛む時候を指すといえば附会の言となろうか。いや，ヒギンソンの記事を読む者にせまってくる感想は，いかにエミリイの詩の

背景が，この種の「夏」によって満たされていたかという点につきるのである。

〔ノート〕

(1) *The Complete Poems of Emily Dickinson* :
(Little Brown, 1960) *Introduction* by Thomas H. Johnson.

(2) 以下（*A. M.*）で示されるものに続くページ番号は合版アトランチック誌（1891年版）のものである。
本学図書館は創刊号に始まるアトランチック誌のバックナンバーを鋭意収集し，完備した資料作成にのりだした。

(3) *Emily Dickinson* : (Twenty Century Views) pp. 16～27。

(4) *Emily Dickinson* : (Twenty Centusy Views) pp. 78～87。

(5) *The Poems of Emily Dickinson* : (Harvard U. P. *Vol.* I) p. 337。

⑥ 「Shakespeare と Dickinson」: (上智大学「英文学と英語学」1964) p. 123。